

## 分類に着目した特許間引用の分析

鈴木 裕

企業の技術開発戦略において、知的財産権の一種である特許の価値評価は重要な課題となっている。代表的な評価手法の一つに、対象となる任意の特許を引用した特許の数(被引用数)が多いほど対象特許の価値が高いとするなどの引用分析がある。技術革新をもたらした特許は他の特許に引用される数が多い傾向にある。しかし、日本の特許文献は長い間分析に適さない形式であったことから未だ欧米ほど研究が進んでいない。また、従来の引用分析では、引用関係の有無や引用数、被引用数のみに注目し、引用関係にある特許の技術内容には注目してこなかった。

本研究では、引用関係にある特許の技術内容を反映すればより詳細に分析が可能であると考え、特許情報の特徴を活かした新しい分析の指標として「特許分類」を加えた分析を試みた。分野によっては、多様な技術的基盤に立脚した発明(技術)はイノベーションをうながす重要な特許である可能性が相対的に高いと考え、使用データである 1993 年から 2002 年までの 10 年分の公開特許公報の半ばに位置する 1998 年公開の特許を標本特許とし、データの前半から標本特許が引用している特許の分類分布(すなわち、引用特許の多様性)を、後半から標本特許の被引用数(すなわち、対象とする特許の重要度)を計測し、技術分野ごとにそれらの関連を探った。具体的には、(1) 特許の被引用数とその特許が引用している特許の分類異なり数との間の相関を計算するとともに、(2) 引用特許の分類異なり数に加えてジニ係数を多様性の指標として用い、標本特許を被引用数が高い特許グループと低い特許グループに分けてそれらが引用している特許の多様性の比較を行った。

(1)については、相関が弱いという結果であったが、(2)に関しては、例外的な分類も存在はするが、被引用数(重要度)の異なる特許グループで、引用特許の分類数・ジニ係数(立脚する技術基盤の多様性)に有意な差が存在するという知見が得られた。(1)の結果から、引用している特許の多様性は、そのまま個別の特許の重要度を推定・予測できる指標にはなるとは言い難いが、(2)の結果から、被引用数が高い特許を大まかに特定する、あるいは被引用数が低い特許の多くを除外する、フィルタリングとしての評価尺度となる可能性を見出した。

(指導教員 芳鐘冬樹)